

資金調達・上級関係
調整官のある一日

税田芳三

2006年9月6日 出勤

曇り。でも少し暖かくて、風が肌心地良い。昨夜の残業で、今朝は寝坊気味。車のラジオのスイッチを入れると丁度、BBCのニュースが「紀子さまに男子が生まれ、皇室典範の見直しは無くなる見通し」と伝えてきた。日本のことがBBCニュースのヘッドラインに取り上げられるなんて珍しい日だな、と思っているうちにオフィスが見えてきた。

到着しても、すぐに駐車場には入れない。二人の警備員からチェックを受けた後、1本目の遮断機のようなバーが上がる。さらに2本目の遮断装置をクリアして駐車場に向かう。その間、車の底を調べられることもしばしば。爆弾テロを警戒しての防護策である。2002年のバグダッドでの国連本部爆弾テロ事件や昨年のロンドンでの爆弾事件以降、事務所周辺の警備は一層強化された。今朝もビルの正面ではイラン人によるデモが行われている。1998年、クルド人によって本部の3階が占拠され、退避した日のことを思い出す。

朝一番

アジア局と企業などからの資金調達を担当している部署と打ち合わせを済ませ、東京事務所との電話会議に望む。議題はナンセン賞授与式典の段取り。今年は日本から初めての受賞者が選ばれた。10万人以上の難民や避難民にメガネを提供してこられた富士メガネの



2006年、UNHCRジュネーブ本部のオフィスにて。現場ではまず着ることのないスーツとネクタイに身を包んで(コンピューター相手に)奮闘中

金井さんだ。長年の地道な活動が国際的に評価されたことは非常に嬉しい。今回の受賞が日本の企業にも良い刺激となって、今後の資金調達に結びつけば、と期待する。

一通りレバノン関係のメールに目を通した後、再び東京の事務所に電話連絡。レバノンの危機、約22億円の緊急アピールに対して日本政府からの拠出金は約6千万円。期待された額より少なかった。その後、復興に関する追加アピールも出されたのだが、日本政府からの追加拠出は望めそうにない。スカンジナビア諸国やアメリカが相次いで拠出金を提示してくる中で、日本担当官としては少し取り残された思いがする。時期を同じくして再び緊急事態を迎えたスリランカの人道支援アピールに対しても、今のところ物資供与の可能性以外は財政支援の反応はない。

2000年に始まった人間安全保障基金の設立を皮切りに、2002年の平和構築無償資金、今年設けられたコミュニティー開発無償資金など、近年では分野毎に資金源がまとめられ、管理されるようになった。そのどれもが21世紀の課題である「貧困」や「平和構築」を念頭に置いた時代のニーズに即したものののだが、UNHCRの場合、緊急人道支援活動という性格上、政府からの通常拠出と緊急無償資金以外の財政源にアクセスしにくくなっている。頭の痛い問題だ。

また、知名度や活動内容についての一般的な理解が低いのも問題だ。UNHCRと言えば「難民」。しかし、具体的に何をしているのかを一言で表すのは困難な上に、しばしば悲壮感が漂う。見たくない、聞きたくない、という人も多い。その人たちに、難民キャンプ設営のための土地の確保や治安維持に始まり、生活必需品の配布や

水の供給、教育に至るまで多岐に亘る活動を説明するのは容易なことではない。またUNHCRは難民だけではなく、故郷へ戻った帰還民や国内避難民、庇護申請者も扱っており、支援している人々の総数はここ10年間あまり変化していない。それでも、近年の統計で難民の数が減ったことだけを取り上げては「何故UNHCRの予算は減らないのか」と問う拠出国が多い。

昼食

リベリアでプログラムの指揮を執っている同僚の長坂さんとランチ。現場での苦労話を聞き、本部の財政状況を伝える。本部勤務の最大の利点は現場にいる同僚と頻繁に会えること。生きた現場の情報が命だ。UNHCRの場合、他の国連機関と違って現場で本部の5倍近い数の職員が働いている。

午後

スリランカへの物資供与のことで仕事が始まった。日本政府に物資供与の要請を出すには、まずジュネーブにある国際機関日本政府代表部に要請書を提出しなければならない。その合間にも、スーダンの担当官から、難民の南部スーダンへの自主帰還プログラムに自転車を使いたいのだが中国大使館に掛け合って欲しい旨の依頼やソマリアの担当官から、年末までに日本からの新たな財政支援の可能性はあるか、など5-6本の問い合わせを受ける。

6時半退社。今日は週一で参加しているテニスの練習会。現場と違って本部勤務は身体を使わない。だから、つい不健康な生活に陥ってしまう。そのささやかな抵抗。それに、テニスコートで会う違う職場の人達との交流は楽しい。明日の仕事の活力になる。



Profile

(さいた よしみ)

上智大学英文科卒。80年からNGOでの活動を通じて難民問題に興味を持ち、86年からUNHCR勤務。ソマリア、スリランカ、フィリピンでの勤務の後、一時退職。その後カンボジアのオペレーションを機に復職し、本部アジア局、旧ユーゴスラビアでの勤務を経て現職。